

水の哲学

ヨハネによる福音書

「わたしが与える水はその人の内で泉となり、
永遠の命に至る水が湧き出る」

ヨハネによる福音書は新約聖書のなかの4つの福音書のひとつ。第4福音書と言われるように、マタイによる福音書、マルコによる福音書、ルカによる福音書につづいて最後に書かれたというのが宗教学上の定説となっている。

イエス＝キリストの生涯と教義を伝えた4つの福音書のなかでもヨハネによる福音書は神の子としてのイエスの姿をより克明に描いている。とりわけ神の愛による魂の救済というキリスト教の核心を象徴的に伝えているのがサマリアの女にイエスが語りかけた表題の言葉だ。

イエスとサマリアの女の対話

サマリアの女とイエスの対話をめぐるエピソードを簡単に紹介しておこう。

イエスはユダヤを離れてガリラヤに旅する途中、サマリア地方にあるシカルという街に立ち寄った。ちょうどお昼どきで弟子たちは食料を買いに行き、イエスは井戸端でひと休みしていた。

するとひとりの女性が水を汲みにきた。そこでイエスが「水を飲ませてほしい」と頼むと、女は「あなたはユダヤ人であり、わたしはサマリア人

であるのに、どうして水を飲ませてくれと頼むのですか」と答える。当時ユダヤ人とサマリア人は対立していたからだ。

これに対してイエスは「あなたに水を飲ませてほしいと言っている者が誰であるかがわかっているなら、あなたのほうからその人に頼み、その人はあなたに生ける水を与えたことであろうに」と言う。女はさらに「主よ、あなたは汲むものをお持ちでないし、井戸は深いのです。あなたはどこからその生ける水を手に入れるのですか」と問いかける。

ここでイエスは表題の言葉を語りかける。

「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかしわたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の



命に至る水が湧き出る」と。

そして女は「主よ、わたしが渇くことのないように、また、わたしが水を汲みにここに来なくてもよいように、その水をわたしに与えてください」と願うのだ。

魂の救済としての水

このあとも女とイエスの会話はつづき、イエスは彼女が何度も離婚を繰り返し、周囲から孤立した荒んだ生活を送っていることを預言する。

そもそも女の住む街は井戸からかなり遠く、大きな水がめを持ち運ぶのはたいへんなことだった。しかし人目を気にして彼女は朝方や夕方涼しい時間帯をわざわざ避け、人のいない真昼を狙って水を汲みにきていた。

こうした状態は彼女自身にとっても苦痛の極みだったにちがいない。そんな切実な心情は「わたしが渇くことのないように、また、わたしが水を汲みにここに来なくてもよいように」という言葉にストレートに表出されている。

ただ彼女がここで欲している水はイエスが与えようとしている水とは明らかに異なっている。彼女は汲めども尽きぬ魔法の泉のような水を求めた。しかしイエスは「この水を飲む者はまた渇く」と井戸水＝物質だけでは彼女が満たされないことを暗示し、それに対置して「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない」と断言する。

イエスの語る「永遠の命に至る水」が精神的なものの象徴としての神の愛による魂の救済であることをここから読みとることができる。



畏怖すべきものの象徴

旧約聖書のノアの洪水のエピソードやマルコによる福音書に出てくる湖を渡るイエスの説話などによると、水は人間に脅威を及ぼす混沌としたものの象徴として描かれている。しかしその一方で水は神の愛による魂の救済を象徴するものともなっている。

たとえば旧約聖書のなかの神への讃美を綴った詩篇では

「涸れた谷に鹿が水を求めるように
神よ、わたしの魂はあなたを求める。
神に、命の神に、わたしの魂は乾く」

「主は羊飼いで、
わたしには何も欠けることがない。
主はわたしを青草の原に休ませ、
憩いの水のほとりに伴い、
魂を生き返らせてくださる」

——などの詩句が散りばめられている。

ここではいわゆる「迷える子羊」としての人間の救済の糧として水が神の愛と等置されている。

ときには混沌の象徴となり、ときには神の愛の象徴となる聖書のなかの水はたんなる物質を超えた超自然的な存在と見做されている。それはキリスト教徒にとって畏怖すべきものの象徴といてもいいだろう。 (高倉)